

野の小さな墓

《水野仙子を葬る》

田山花袋

昨年十一月頃だつたと思ふ。不治の病は病にあらず、希くは生の執着を擺脫せよ。かう私は草津のかの女の許に言つてやつた。しかし病を持たないものが、不治の病に罹つてゐるものに對して、さういふことを言つてやるのは、餘り慈悲深いことではなかつた。いくらか残酷な感じもした。しかもそれを敢てしたのは、その徹底裡から新しい生命の復活を萬一に庶幾したからであつた。

今はそれも徒爾に歸した。かの女は五月の下旬に山中の病院の一室でさびしく死んだ。

草津の山の中のさまが私に思ひ出されて來た。曾て二十年前に一度行つたことのある山の高原の上の

温泉場が、烈しい湯の縦横に町の中を横流する温泉場が、または信州の澁温泉から大きな峠を越して、白根の噴火坑を見て、そして辛うじてやつて來たその草津の町のさまが――。

岩代の須賀川町の一商家に生れて、文才があつたがために東京に出て、文壇にもかなりにも名を知られて、そして山の中の病院の一室に死んで行つたかの女！ 私にはいろいろな追憶がそれからそれへと思ひ出されて來た。

矢張、早く死ぬために完成された才であつたのか。『暗い家』などといふすぐれた短篇はまだ十六か十七の時に書かれたものであつた。祖母に伴れられてお寺に行つたことを書いた寫生風のものなどは、或

はもつと以前に書かれたものであつたかも知れなかつた。かの女は暗い土藏の中に引籠つて、幼ない下げ髪姿で、さうした無数の短いものをかいた。

曾てかの女から聞いたところに由ると、その才能は、父親の方から受けたものがその十の六七に居るといふことであつた。かの女の父親は面白い人らしかつた。一生を田舎の商賈に過して了つたけれど、あついで心とやさしい情と強い意志とが一緒になつたやうな人であつたらしかつた。釜屋の貞ちゃん――さう呼ばれて過したかの女の幼い頃なども私に思ひ出されて來た。

私の初めて逢つた時は、まだ十九歳の一少女だつた。赤い帯揚げをした、桃割に結つた、無邪氣な田舎田舎した、かうした娘があつた『暗い家』を書いたかと思はれるやうな――。しかも私は沈黙の中に包まれた聰明と無邪氣の中にかくされた誠實とを見落さなかつた。沈黙なればこそ、聰明なればこそ、誠實なればこそ、あつたすぐれた本當の作が出來たの

だと思つた。

かの女が私の家にゐたのは、一年と少しであつた。しかし私の妻などは、常にかの女には感心してゐて、死の報の傳つて來た時には、『まあお貞さんが……。本當ですか。あのお貞さんが死んで了つたとは何うしても思へない……：：：好きな人は皆な死んで行きますね』かう言つて涙を流した。

かの女が私の家にゐる時分に生れた女の兒は、今年十一になつて、もう小學校の四年級だが、その姉になる女の兒は一つ違ひの十二で、その時分、かの女の世話になつたことは一通りでなかつた。生れた方の兒が母親の乳房に縋つたり何かしてゐると、姉は焦れて體が痩せ細るまで泣くのが常であつた。それをかの女はよく世話を見て呉れた。

『お前、お貞さん、覚えてゐるかえ？』

死の報の來た日に、學校から歸つて來たのを待つて、私は姉の方の女の兒に言つた。

『覚えてゐますとも……：：：』

『死んだよ、あのお貞さんが——』

『え、あのお貞さんが、何處で——』

かう姉の女の兒は目を瞠るやうにした。

『草津ツていふところで』

『……………』

流石に悲しいと見えて、黙つて、女の兒は眼に涙をためた。

『お前が小さい時、大變世話になつたんだがな。覚えてゐるかな』

『……………』

私には、私の家の三疊にかの女がゐた頃のことに限りに思ひだされて來た。(人間は何うせ死んで行くのである。何も残り多いことはない。若くつて死んだのは惜しいけれど、兎に角かの女の持つたものをあれだけでも世に出してゐるのはせめてものことだ。世間には唯生れてそして死ぬものも澤山にある)こんなことを私は考へた。

『娘』といふ作があつた。それは娘から女になつて行く心の移り變りを書いたものであつたが、その心理の描寫は、ちよつと他に類のない位によく描かれてあつた。無論それは自分の閱歷を基礎にして書いたものであつたが、しかもそれが非常に巧みに藝術化されてあつて、決して單なる Ich—Roman の弊に落ちることはなかつた。かの女の閱歷であると共に、すべての娘の心の閱歷であらねばならない要素が澤山に澤山にあつた。主客の融合の度數が非常に高い程度のところにあつた。

しかし、さうした才能を持つて居りながら、それを何の位まで、自己の意識の竈の火の中に入れて燃焼させたか？ 肉體と精神とが何の位の度數まで近く相解れて行つてゐたか？ それは私にはちよつと疑問だ。或は『娘』を書く頃には、無意識に、唯、その天分によつて書いてゐはしなかつたか。何うして、かういふものが書けるかをすら自分に知らずに書いてゐはしなかつたか。

従つてかの女に取つては、實際と藝術との問題は、始めは何の事はないやうに見えて居りながら、いざそれに正面に相對するといふ形に立つてからは、かなり大きな問題であつたらしかつた。矢張、あらゆる作家が打突つて苦しむやうに、かの女も藝術と實際との問題に苦んだに相違なかつた。

かの女が無意識に持つてゐた主客融合は、このために少くとも大きな影響を一つ受けなければならなくなつた。戀に目覺め、世間に目覺めたかの女は、今までのやうに、藝術の殿堂の上にヂツとして坐つてゐることが出来なくなつた。かの女は世間へ下りて來た。また肉體の中へ入つて行つた。

藝術と生活の一致は、その終極の理想であることは争はれない事實である。しかしこれは始めから容易に得られることではなくつて、或は生活に、或は藝術に、時には五分五分、又は七分三分、四分六分といふやうに傾いたり平衡を得たりして、段々進んで行くことであつて、その一上一下、一進一退は

如何なる作者も皆なやらなければならぬものである。かの女もかなり深くこの一上一下には疲れたらしかつた。

従つてかの女には、形式の打破や、心理の轉變や、生活の藝術壓迫や、または藝術の生活壓迫が絶えず巴渦を卷いてゐたらしかつた。一時はかの女は所謂自然主義から離れ、觀察から離れ、解剖から離れ、飽まで主觀的になつて、すべてを自己の心の泉にたよらうとしたほどであつた。しかし、これはかの女が弱くなつたためであつたことを誰も氣が附くものはなかつた。

私の考へでも、かの女がさうなつて行くのは惜しかつた。それは無論、一時の混亂にすぎないと思つてゐたけれども、またその混亂から本當の芽が出て來ることを期待してゐたがために、或は却つて、その方が好いかも知れないと思つてはゐたけれども、しかし、矢張それは惜しかつた。そのため、かの女は私の家にやつて來る度に、いつも『皮肉な師

『匠』を發見したに相違なかつた。何故なら、私はいつも『反抗勝ちな女の弟子』をかの女の態度に發見したから。

しかし、何は措いても、誠實なかの女であつたことは争はれなかつた。

思ふに、かの女は藝術にも誠實であつたと共に、生活にも誠實であつたに相違ない。夫にも、舅にも、夫の兄弟にも誠實であつたに相違ない。私に反抗するやうに見えたのも、矢張、私に對して誠實であつたからであつた。

私の家にある時分には、細かい日記をかの女はつけてみた。その中には、私のことなどがいろいろに批評的に書いてあつた。『奥さんばかりぢやない、先生もわるい……』こんな風に書いてあつた。それも道理である。その頃の私は、思ひきつたデカダンであり、悪魔であつたから……。しかし、その時分の方が、矢張、私も強かつた。

かの女は、書くものに對しては、常に丁寧であつた。決して筆は早い方ではなかつた。『何うも一日書いて四五枚しか書けないんですもの』かうした言葉を私は私の家にある時分によく聞いた。従つてかの女の作には割合に冗なところがない。また書いたものにも拙いものがない。何うでも好いと言つたやうなものがない。残つた作品は餘り多いといふ方ではないが、決して詰らない作はないやうに私は思ふ。

骨を持つて來た麻布の宅に、私は前田君と一緒に出掛けて行つた。

それはさびしい一夜であつたが、しかしそこに集つた人達は、夫とか、兄弟とか、師とか、すべて親しい人達の限りであつたことは、かの女も満足に思ふであらうと私は思つた。草津で撮した猫を抱いた寫眞がそこに灯の前に置いてあつた。その眼がはつきりしてゐて、まだそこにかの女の魂が生きてゐるやうな氣がした。

『好く撮れてゐますね、これは——』

かう私は言つた。聞くと、かの女も生前、その寫眞が氣に入つてゐて、死んだら、これを靈前に飾つて貰ひたいなどと言つてゐたといふことであつた。

草津でも話が段々人達の口を上つた。

『もう、一月ほど前には、餘程やさしくなつてゐました』

かうかの女の田舎の姉は話した。『娘』の中に書いてある姉、かの女が唯一の力と頼みにした姉である。また姉の方から言つては、自分の妹にさうした小説家の出たことを誇りにし、何うかしてその病氣を治ほさせてやらうと長い間苦心した姉である。その姉の話は、さつぱりとして、何の悲しいトオンを帯びてゐなかつたけれども、しかし、私にはいろいろな悲哀を催させた。死に近く、洗禮を受けさせやうとして、牧師がやつと來た時には、手を振つて、自からそれを斷つたといふ話であつたが、それにも私は藝術家の雄々しさを感した。

姉は『沈み行く日』のモデルの話などをした。

葬式の日は曇つた日であつた。梅雨に近く、野には卯の花が白く咲いてゐたり、水の増した小川の岸に名もない赤い花が點綴されてあつたりした、麥は黄熟して既にあら方刈られ、ところに由つては、田植の始つたところなどもあつた。

雜司ヶ谷の墓地——大きな櫛のある路の左側、その小さな、まだ周圍に垣も何もつくらない、いかにも野中のさびしさを人々に思はせるやうな墓地の穴の中に、髪の毛を長くした川浪君は、抱へて來たかの女の遺骨を靜かに下した。墓は忽ちにして築き上げられた。

送つて行つた人々は兄君の手から銘々櫛の一枝を貰つて、それを墓前の白木の机の上に置いて手を合せた。

【入力者注】（数字は頁と行数）

174 上 8 「庶幾した」に修正

175 上 1 「あつかも」↓「あつたかも」

175 下 6 行の字数を合わせるために半角スペースを

2つ挿入

176 下 4 行の字数を合わせるために半角スペースを

2つ挿入

176 下 15 行の字数を合わせるために半角スペースを

1つ挿入

177 上 15 行の字数を合わせるために半角スペースを

1つ挿入

177 下 9 「らうした」↓「らうとした」

177 下 16 行の字数を合わせるために半角スペースを

2つ挿入

179 上 11 行の字数を合わせるために半角スペースを

2つ挿入

底本：「文章世界」第十四卷第七号

大正八（1919）年七月一日発行

入力：小林 徹

公開：令和七年六月九日

リンク：[水野仙子関連の参考文献](#)